

漱石全集 第七卷

それから 他

(全 16 冊)

昭和35年12月25日 初版発行	定價 二六〇円	著者 夏目漱石	編集者 伊藤吉田精一整	発行者 角川源義	印刷所 中光印刷株式会社	製本所 株式会社 鈴木製本所	発行所 株式会社 角川書店	東京都千代田区富士見町 振替 東京一九五二〇八
---------------------	---------	------------	----------------	-------------	-----------------	----------------------	---------------------	----------------------------

落丁・乱丁本はお取替えいたします

それから

一

誰か慌たゞしく門前を馳けて行く足音がした時、代助の頭の中には、大きな組下駄が空から、ぶら下っていた。けれども、その組下駄は、足音の遠退くに從つて、すうと頭から抜け出して消えてしまった。そうして目が覺めた。

枕元を見ると、八重の椿が一輪疊の上に落ちてゐる。代助は昨夕床の中でたしかにこの花の落ちる音を聞いた。彼の耳には、それが護謨毯を天井裏から投げ付けたほかに響いた。夜が更けて、四隣が静かなせいかもしれないが、念のため、右の手を心臓の上に載せて、肋のはずれに正しく中る血の音を確かめながら眠に就いた。

ぼんやりして、しばらく、赤ん坊の頭ほどもある大きな花の色を見詰めていた彼は、急に思い出したように、寐ながら胸の上に手を当てて、また心臓の鼓動を

検しはじめた。寐ながら胸の脈を聴いてみるのは彼の近來の癖になつてゐる。動悸は相変らず落ち付いてたしかに打つてゐた。彼は胸に手を当てたまゝ、この鼓動の下に、温かい紅の血潮の緩く流れるさまを想像してみた。これが命であると考えた。自分は今流れる命を掌で抑えているんだと考えた。それから、この掌に應える、時計の針に似た響は、自分を死に誘う警鐘のようなものであると考えた。この警鐘を聞くことなしに生きていられたなら、——血を盛る袋が、時を盛る袋の用を兼ねなかつたなら、いかに自分は氣楽だろう。いかに自分は絶対に生を味わいうるだろう。けれども——代助は覺えず慄とした。彼は血潮によつて打たる掛念のない、静かな心臓を想像するに堪えぬほどに、生きたがる男である。彼は時々寐ながら、左の乳の下に手を置いて、もし、こゝを鉄槌で一つ撲されたならと思うことがある。彼は健全に生きていながら、この生きてゐるという大丈夫な事実を、ほとんど奇跡のとき僥倖とのみ自覺しだすことさえある。

彼は心臓から手を放して、枕元の新聞を取り上げた。

夜具の中から両手を出して、大きく左右に開くと、左側に男が女を斬っている絵があった。彼はすぐ外の頁へ目を移した。そこには学校騒動が大きな活字で出てゐる。代助は、しばらく、それを読んでゐたが、やがて、倦怠そうな手から、はたりと新聞を夜具の上に落した。それから烟草を一本吹かしながら、五寸ばかり布団を摺り出して、畳の上の棒を取って、引つ繰り返して、鼻の先へ持って来た。口と口髭と鼻の大部分がまったく隠れた。煙りは棒の弁と蕊に絡まって漂うほど濃く出た。それを白い敷布の上に置くと、立ち上がつて風呂場へ行った。

そこで丁寧に歯を磨いた。彼は歯並の好いのを常に嬉しく思っている。肌を脱いで綺麗に胸と背を摩擦した。彼の皮膚には濃かな一種の光沢がある。香油を塗りこんだあとを、よく拭き取ったように、肩を揺かしたり、腕を上げたりするたびに、局所の脂肪が薄く漲って見える。かれはそれにも満足である。次に黒い髪を分けた。油を塗けないでも面白いくらい自由になる。髭も髪同様に細くかつ初々しく、口の上を品よく蔽う

ている。代助はそのふつくらした頬を、両手で両三度撫でながら、鏡の前にわが顔を映していた。まるで女がお白粉を付ける時の手付と一般であった。実際彼には必要があれば、お白粉さえ付けかねぬほどに、肉体に誇を置く人である。彼のもっとも嫌うのは羅漢のような骨格と相好で、鏡に向うたびに、あんな顔に生れなくて、まあ可かったと思うくらいである。その代人からお洒落と言われても、なんの苦痛も感じえない。それほど彼は旧時代の日本を乗り超えている。

約三十分の後彼は食卓に就いた。熱い紅茶を啜りながら焼麴麴に牛酪を付けていると、門野という書生が座敷から新聞を畳んで持って来た。四つ折りにしたのを座布団の傍へ置きながら、

「先生、たいへんなことが始まりましたな」と仰山な声で話しかけた。この書生は代助を捕まえては、先生と敬語を使う。代助も、はじめ一二度は苦笑して抗議を申し込んだが、えへへ、だって先生と、すぐ先生にしてしまうので、やむをえずそのまゝにしておいたのが、いつか習慣になって、今では、この男に限

って、平氣に先生として通している。實際書生が代助のような主人を呼ぶには、先生以外にべつだん適當な名称がないということを、書生を置いてみて、代助もはじめて悟つたのである。

「学校騒動のことじゃないか」と代助は落付いた顔をして麵麴を食つていた。

「だって痛快じゃありませんか」

「校長排斥がですか」

「えゝ、とうてい辭職もんでしよう」と嬉しがっている。

「校長が辭職でもすれば、君はなにか儲かることでもあるんですか」

「冗談いっちゃ不可ません。そう損得ずくで、痛快がられやしません」

代助はやっぱり麵麴を食つていた。

「君、あれはほんとうに校長が悪らしくって排斥するの、他に損得問題があつて排斥するの、知つてますか」と言いながら鉄瓶の湯を紅茶茶碗の中へ注した。

「知りません。なんです、先生は御存じなんです

か」

「僕も知らないさ。知らないけれども、今の人間が、得にならないと思つて、あんな騒動をやるもんかね。ありや方便だよ、君」

「へえ、そんなもんですかな」と門野はやゝ眞面目な顔をした。代助はそれぎり黙つてしまつた。門野はこれより以上通じない男である。これより以上は、いくら行つても、へえそんなもんですかなで押し通して澄ましている。こちらの言うことが応えるのだから、応えないのだから、まるで要領を得ない。代助は、そこが漠然として、刺激が要らなくて好いと思つて書生に使つていたのである。その代り、学校へも行かず、勉強もせず、一日ごろ／＼している。君、ちつと、外国語でも研究しちゃどうだなどと言うことがある。すると門野はいつでも、そうでしょう、とか、そんなもんでしょ、とか、とか答えるだけである。けつして為ましようということは口にしない。またこう、怠惰（なまけ）ものは、そうはつきりした答（こた）えができないのである。代助のほうでも、門野を教育しに生れて来たわけでもないか

ら、好加減にして放っておく。幸い頭と違って、身体
のほうは善く動くので、代助はそこを大いに重宝がっ
ている。代助ばかりではない、従来からいる婆さんも
門野のお蔭でこのごろはたいへん助かるようになった。
その原因で婆さんと門野とはすこぶる仲が好い。主人
の留守などには、よく二人で話をする。

「先生はいいなにを為る気なんだろうね。小母さ
ん」

「あのくらいになっていらつしやれば、なんでもでき
ますよ。心配するがものはない」

「心配はせんがね。なにか為たら好きそうなもんだと
思うんだが」

「まあ奥様でもお賈いになってから、ゆっくり、お役
でもお探しなさるおつもりなんでしょうよ」

「いゝつもりだなあ。僕も、あんなふうに一日本を読
んだり、音楽を聞きに行ったりして暮していたいな」

「お前さんが？」

「本は読まんでも好いがね。あゝいう具合に遊んでい
たいね」

「それはみんな、前世からの約束だから仕方がない」
「そんなものかな」

まずこういう調子である。門野が代助の所へ引き移
る二週間前には、この若い独身の主人と、この食客と
の間に下のような会話があった。

「君はどっかの学校へ行ってるんですか」

「もとは行きましたがな。今は廃めちまいました」
「もと、どこへ行つたんです」

「どこって方々行きました。しかしどうも厭きつぽい
もんだから」

「じき厭になるんですか」

「まあ、そうですな」

「で、たいして勉強する考えもないんですか」

「えゝ、ちよつとありませんな。それに近ごろ家の都
合が、あんまり好くないもんですから」

「家の婆さんは、あなたの御母さんを知ってるんだっ
てね」

「えゝ、もと、じき近所にいたもんですから」

「御母さんはやっぱり……」

「やっぱりつまらない内職をしているんですが、どうも近ごろは不景気で、あんまり好くありません」

「好くないようですって、君、いっしょにいるんじゃないですか」

「いっしょにいることはいますが、つい面倒だから聞いたこともあります。なんでもよくこぼしてようです」

「兄さんは」

「兄は郵便局のほうへ出ています」

「家はそれだけですか」

「まだ弟がいます。これは銀行の——まあ小使に少し毛の生えたぐらいなところなんでしょう」

「すると遊んでるのは、君ばかりじゃないか」

「まあ、そんなもんですな」

「それで、家にいるときは、なにをしているんです」

「まあ、たいてい寐ていますな。でなければ散歩でも為ますかな」

「ほかのものが、みんな稼いでるのに、君ばかり寐ているのは苦痛じゃないですか」

「いえ、そうでもありませんな」

「家庭がよっぽど円満なんですか」

「べつだん喧嘩もしませんがな。妙なもので」

「だって、御母さんや兄さんから言ったら、一日も早く君に独立してもらいたいでしょうがね」

「そうかもしれせんな」

「君はよっぽど気楽な性分と見える。それがほんとうのところなんですか」

「え、別に嘘を吐く料簡もありませんな」

「じゃまったくの呑気屋なんだね」

「え、まあ呑気屋っていうものでしょうか」

「兄さんは何歳になるんです」

「こうつと、取って六になりますか」

「すると、もう細君でも貰わなくちゃならないでしょう。兄さんの細君ができて、やっぱり今のようになっているつもりですか」

「その時に為ってみなくっちゃ、自分でも見当が付きませんが、なにしろ、どうか為るだろうと思つてます」

「そのほかに親類はないんですか」

「叔母おばが一人ありますかな。こいつは今、浜いづみで運漕業うんそうぎようをやってます」

「叔母さんが？」

「叔母が遣やつてゐるわけでもないんでしょうが、まあ叔父おじですな」

「そこへでも頼んで使つかつてもらつちや、どうです。運漕業うんそうぎようならだいたい人が要いるでしょう」

「根ねが怠惰なまじろもんですからな。おおかた断ことわるだろうと思おもつてゐるんです」

「そう自任しじんしていちや困る。実は君の御母さんが、家の婆おばあさんに頼んで、君を僕の宅うちへ置いてくれまいかという相談があるんですよ」

「えゝ、なんだかそんなことを言いつてました」

「君自身は、いったいどういふ気きなんです」

「えゝ、なるべく怠なまけないやうにして……」

「家へ来るほうが好きすいんですか」

「まあ、そうですね」

「しかし寐ねて散歩するだけじや困る」

「そりや大丈夫です。身体からだのほうは達者たつしやですから。風呂ふろ呂ろでもなんでも汲くみます」

「風呂は水道があるから汲くまないでも可いい」

「じゃ、掃除そうじでもしましょう」

門野はこういう条件で代助の書生しやせいになったのである。代助はやがて食事を済すまして、烟草たばこを吹ふかした。今まで茶簞ちだん笥すの陰かげに、ぼつねんと膝ひざを抱かかえて柱はしらに倚より懸かつていた門野は、もう好い時分だと思おもつて、また主人に質問しつもんを掛かけた。

「先生、今朝けさは心臓しんざうの具合ぐあいはどうですか」

このあいだから代助の癖くせを知しつてゐるので、いくぶんか茶化ちやかした調子である。

「今日はまだ大丈夫だ」

「なんだか明日あしたにも危あやしくなりそうですね。どうも先生せんせいみたやうに身体からだを氣きにしちや、——しまいにはほんとうの病氣びやうきに取とつ付つかれるかもしれせんよ」

「もう病氣びやうきですよ」

門野はたゞへえと言いつたぎり、代助の光沢ひかりの好い顔色かおいろや肉の豊かな肩かたのあたりを羽織はおりの上から眺ながめてい

る。代助はこんな場合になるといつでもこの青年を氣の毒に思う。代助から見ると、この青年の頭は、牛の脳味噌でいっぱい詰っているとしたか考えられないのである。話をすると、平民の通る大通りを半町ぐらしか付いて来ない。たまに横町へでも曲ると、すぐ迷児になってしまう。論理の地盤を堅に切り下げた坑道などへは、てんから足も踏み込めない。彼の神経系に至ってはなおさら粗末である。あたかも荒縄で組み立てられたるかの感が起る。代助はこの青年の生活状態を観察して、彼は必竟なんのために呼吸をあえてして存在するかを怪しむことさえある。それでいて彼は平氣にのらくらしている。しかもこののらくらをもって、暗に自分の態度と同一型に属するものと心得て、なかなか得意に振舞たがる。そのうえ頑強一点張りの肉体を笠に着て、かえて主人の神経的な局所へ肉薄して来る。自分の神経は、自分に特有なる細緻な思索力と鋭敏な感応性に対して払う租税である。高尚な教育の彼岸に起る反響の苦痛である。天爵的に貴族となつた報に受る不文の刑罰である。これ等の犠牲に甘んずれ

ばこそ、自分は今の自分に為れた。否、ある時はこれ等の犠牲そのものに、人生の意義をまともに認める場合さえある。門野にはそんなことはまるで分らない。

「門野さん、郵便は来ていなかったかね」

「郵便ですか。こうつと。来ていました。端書と封書が。机の上に置きました。持って来ますか」

「いや、僕があっちへ行っても可い」

齒切れのわるい返事なので、門野はもう立つてしまった。そうして端書と郵便を持って来た。端書は、今日二時東京着、たゞちに表面へ投宿、とりあえず御報、明日午前会いたし、と薄墨の走り書の簡單極るもので、表に裏神保町の宿屋の名と平岡常次郎という差出人の姓名が、裏と同じ乱暴さ加減で書いてある。

「もう来たのか、昨日着いたんだな」と独り言のように言いながら、封書のほうを取り上げると、これは親爺の手蹟である。二三日前歸つて来た。急ぐ用事でもないが、いろいろ話があるから、この手紙が着いたら来てくれろと書いて、あとには京都の花がまだ早かつたの、急行列車がいっぱいで窮屈だったなどといふ閑

文字が数行列ねてある。代助は封書を巻きながら、妙な顔をして、両方見較べていた。

「君、電話を掛けてくれませんか。家へ」

「はあ、お宅へ。なんて掛けます」

「今日は約束があつて、待ち合せる人があるから上がれないつて。明日か明後日きつと伺いますからつて」

「はあ、どなたに」

「親爺が旅行から歸つて来て、話があるからちよつと来いつていうんだが、——なに親爺を呼び出さないでも可いから、誰にでもそう言つてくれたまへ」

「はあ」

門野は無雜作に出て行つた。代助は茶の間から、座敷を通つて書齋へ歸つた。見ると、奇麗に掃除ができてゐる。落椿もどこかへ掃き出されてしまつた。代助は花瓶の右手にある組み重ねの書棚の前へ行つて、上に載せた重い写真帖をとり上げて、立ちながら、金の留金を外して、一枚二枚と繰り始めたが、中ごろまで来てびたりと手を留めた。そこには二十歳ぐらいの女の半身がある。代助は目を俯せてじつと女の顔を見詰

めていた。

二

着物でも着換えて、こちから平岡の宿を訪ねようかと思つてゐるところへ、おりよく先方から遣つて来た。車をがら／＼と門前まで乗り付けて、こゝだこゝだと梶棒を下さした声はたしかに三年前分れた時そっくりである。玄関で、取次の婆さんを捕まえて、宿へ藁口を忘れて来たから、ちよつと二十錢貸してくれと言つたところなどは、どうしても学校時代の平岡を思い出さずにはいられない。代助は玄関までの平岡を思行つて、手を執らぬばかりに旧友を座敷へ上げた。

「どうした。まあゆつくりするが好い」

「おや、椅子だね」と言いながら平岡は安樂椅子へ、どざりと身体を投げ掛けた。十五貫目以上もあるやうなうわが肉に、三文の価値を置いていないやうな抜かい方に見えた。それから椅子の背に坊主頭を靠たして、ちよつと部屋の中を見回しながら、

「なか／＼、好い家だね。思つたより好い」と賞めた。

代助は黙って巻簾入の蓋を開けた。

「それから、以後どうだい」

「どうの、こうのって、——まあいろ／＼話すかね」

「もとは、よく手紙が来たから、様子が分ったが、近ごろじゃちつとも寄さないもんだから」

「いやどこもかしこも御無沙汰で」と平岡は突然眼鏡を外して、背広の胸から皺だらけの手帛を出して、目をばち／＼させながら拭きはじめた。学校時代からの近眼である。代助はじつとその様子を眺めていた。

「僕より君はどうだい」と言いながら、細い蔓を耳の後へ絡みつけに、両手で持つて行った。

「僕は相変らずだよ」

「相変らずがいちばん好いな。あんまり相変るものだから」

そこで平岡は八の字を寄せて、庭の模様を眺めだししたが、不意に語調を更えて、

「やあ、桜がある。今ようやく咲き掛けたところだね。よほど気候が違う」と言った。話の具合がなんだか故のようにしんみりしない。代助も少し気の抜けたふう

に、

「向うはだいぶ暖かいだろう」と序同然の挨拶をした。すると、今度はむしろ法外に熱した具合で、

「うん、だいぶ暖かい」と力のはいった返事があつた。あたかも自己の存在を急に意識して、はつと思つた調子である。代助はまた平岡の顔を眺めた。平岡は巻簾に火をつけた。その時婆さんがようやく急須に茶を淹れて持つて出た。今しがた鉄瓶に水を注してしまつたので、煮立るのに暇が入つて、つい遅くなつて済みませんと言訳をしながら、洋卓の上へ盆を載せた。二人は婆さんの喋舌てるあいだ、紫檀の盆を見て黙つていた。婆さんは相手にされないの、独りで愛想笑いをして座敷を出た。

「ありやなんだい」

「婆さんさ。雇つたんだ。飯を食わなくっちゃならな

いから」

「お世辞が好いね」
代助は赤い唇の両端を、少し弓なりに下の方へ彎げて蔑むように笑つた。

「今までこんなところへ奉公したことがないんだから仕方がない」

「君の家から誰か連れて来れば好のに。おおぜいいるだろう」

「みんな若いのばかりでね」と代助は真面目に答えた。平岡はこの時はじめて声を出して笑った。

「若けりゃなお結構じゃないか」

「とにかく家の奴は好くないよ」

「あの婆さんのほかに誰かいるのかい」

「書生が一人いる」

門野はいつの間にか歸つて、台所の方で婆さんと話をしていた。

「それぎりかい」

「それぎりだ。なぜ」

「細君はまだ貰わないのかい」

代助はこゝろもち赤い顔をしたが、すぐ尋常一般のきわめて平凡な調子になった。

「妻を貰ったら、君の所へ通知ぐらいするはずじゃないか。それよりか」——と言ハハト、びたりと已め

た。

代助と平岡とは中学時代からの知り合で、ことに学校を卒業して後、一年間というものは、ほとんど兄弟のように親しく往来した。その時分は互にすべてを打ち明けて、互に力に為り合うようなことを言うのが、互に娛樂の尤なるものであった。この娛樂が變じて実行となったことも少なくないので、彼等は双互のために口にしたすべての言葉には、娛樂どころか、常に一種の犠牲を含んでいと確信していた。そうしてその犠牲を即座に払えば、娛樂の性質が、忽然苦痛に變ずるものであるという陳腐な事実にさえ気が付かずにいた。一年の後平岡は結婚した。同時に、自分の勤めている銀行の、京坂地方のある支店詰になった。代助は、出立の当時、新夫婦を新橋の停車場に送つて、愉快そうに、じき歸つて来たまゝと平岡の手を握った。平岡は、仕方がない、当分辛抱するさと打遣るように言つたが、その眼鏡の裏には得意の色が羨ましくらい動いた。それを見た時、代助は急にこの友達を憎らしく思った。さへ歸つて、一日部屋へはいったなり考え込

んでいた。嫂あなよめを連れて音楽会へ行くはずのところを断わって、大いに嫂に氣を揉もましたくらいである。

平岡からはたえず音便おんべんがあった。安着の端書はがき、向うで世帯しやたいを持った報知、それが済むと、支店勤務の模様、自己将来の希望、いろ／＼あった。手紙の来るたびに、代助はいつも丁寧な返事を出した。不思議なことに、代助が返事を書くときは、いつでも一種の不安に襲われる。たまには我慢がまんするのが厭いやになって、途中で返事を已やめてしまうことがある。たゞ平岡のほうから、自分の過去の行為に対して、いくぶんか感謝の意を表して来る場合に限って、やす／＼と筆が動いて、比較的なだらかな返事が書けた。

そのうちだん／＼手紙の遣り取りが疎遠そえんになって、月に二遍が、一遍になり、一遍がまた二月、三月に跨またがるように間を置いて来ると、今度は手紙を書かないほうが、かえって不安になって、なんの意味もないのに、たゞこの感じを駆逐くそくするために封筒の糊のりを湿すことがあった。それが半年ばかり続くうちに、代助の頭も胸もだん／＼組織が変かつてくるように感ぜられてき

た。この変化に伴って、平岡へは手紙を書いても書かなくつても、まるで苦痛を覚えないようになってしまった。現に代助が一戸を構えて以来、約一年余というもの、この春年賀状の交換のとき、序ついでをもって、今の住所を知らしただけである。

それでも、ある事情があつて、平岡のことはまるで忘れるわけにはゆかなかつた。時々思い出す。そうして今ごろはどうして暮くしているだろうと、いろ／＼に想像してみることがある。しかしたゞ思い出すだけで、べつだん問い合あせたりするほどに、氣を揉む勇氣も必要もなく、今日まで過すしてきたところへ、二週間前に突然平岡からの書信が届いたのである。その手紙には近々当地を引き上げて、御地ごんちへまかり越すつもりである。たゞし本店からの命令で、榮転の意味を含んだ他動的の進退と思つてくれば困る。少し考かんがへがあつて、急に職業替をする氣になったから、前京のうゑはなにぶんよろしく頼むとあった。このなにぶん、むの頼むは本當の意味の頼むか、または単頼むか不明だけれども、平岡の**一身上に**無